

# 今北洪川老師の禪修行

PDF

田 中 寛 洲

今北洪川老師は、文化十三年（一八一六）に摂津国大坂に生まれた。最初は儒者として世に立ったが、のち二十五歳の時に禪の修行を志して出家し、京都と岡山とで名僧について修行に勤め、鎌倉の円覚寺僧堂の開単した禅僧であり、法嗣に釈宗演を打ち出している。

鈴木大拙（明治三年～昭和四十一年、一八七〇～一九六六）は、洪川老師の晩年に居士として親炙し、更に釈宗演老師について多年禪の修行を志し、その流暢な英語力と平常心そのものの様な風格とで、全世界に広く禪を紹介したが、彼は洪川老師の追憶のために、『今北洪川』という一書をものした。そのなかで洪川老師について次のように語っている。

「洪川老師は学と徳との禅匠であつた。そしてそれは至誠の一心で貫通せられてゐる。老師に性誠の説あるは固よりその所であるが、これは普通に『学者』の言うところと違って、師自らの体験を叙したものに他ならぬ。ここにその特色がある。」

大拙はまた、「老師の如き型の禅僧は、日本ではもはや過去のものとなった。固よりやむを得ない事実でもあろうが、なんだか物寂しいような気がしてならぬ」とも述べている。

幕末から維新にかけて、武術や剣道のみならずその他の技芸の領域においても「名人」とか「達人」と呼ばれる人が輩出したが、それらの卓越した人達が達し得た深遠な境地は、大抵の場合、もはや後継者が絶えてしまつて判らなくなつてしまつている。伝統というのは一旦途切れればなかなかと通りには修復し難いからである。

さて、これから臨済宗の公案修行とはいかなるものかを、洪川老師の禅の修行過程に従つて詳しく見ていくことにしよう。（小畑文鼎『続近世禅林僧宝伝』思文閣、参照。）

老師は諱いみなは宗温、字あさなは洪川、室号は蒼龍窟と言ひ、別に虚舟と号する。行雲流水の修行中は案山子かかしと称した。摂州福嶋郷（大阪市福島区）の生まれで、俗姓は今北氏と言ひ、その祖は清和天皇の皇胤みづういん（子孫）である。

その後、四家に分かれて、東西南北の四姓を賜つたが、北氏は今北をもつて氏とした。中古の時代には或る大名の世臣せいしん（代々の家臣）となり、戦に功があった。十七代の子孫は家臣としての職を辞して農業に専念した。二十代の末裔の忠久は確乎斎と号したが、この人が洪川老師の父親である。

彼は菊田氏から嫁を娶って男子三人をもうけたが、老師はその三男であった。父母はかつて象峰権現に祈願して男子の出生を望んだが、その結果、権現の祭日であった文化十三年七月十日（一八一六）に生まれたのが、洪川老師であった。幼時でも夏は暑いからといって下着を脱いで裸になったりせず、冬でも囲炉裏で暖を取ることはなかった。終日父の書齋にいて子供同士の遊びには加わることをしなかったので、郷里の人々は皆珍しいことだと称えたと言う。

七歳になると、父に初めて漢籍の素読を習ったが、わずか二年にして聖賢の書の根本經典である四書五経を了解してしまった。九歳の少年が四書五経を讀破して、しかも内容をよく分かったと言うのは実に驚くべきことであるが、これは何も洪川老師だけの特別のことではない。明治初頭以前の我国では、幼時から塾や寺子屋などで漢籍の素読などを学ぶことが普通だった。

漢籍と言うのは主として中国の經典や歴史書などであったが、これらの素読を通して昔の人々は人生の生き方や人の道、また人情の機微などを卓越した先人達から学ぶことが出来たのである。今日ではこの種の教育は全くと言って良いほど行われていないが、まことに残念なことである。自らの東洋的、日本的基盤を閑却しては、東洋人、日本人としてのアイデンティティー（主体性、独自性）が自覚出来ないのは当然である。

さて洪川老師は九歳になると地元の福泉仙桂師について漢籍を更に深く学んだ。十三歳の頃には文章の意味を十分に解釈することが出来た。秦漢以前の書は大抵卒業して、ただ周礼しゅうらい、儀礼ぎらいの二礼を讀んでいないだけであった。

十四歳の春に仙桂は老師を自分の儒学の師である藤澤東ガイのところ面接させる為に連れて行った。東ガイは白文の『徂徠集』そらい（荻生徂徠一六六六〜一七二八）を出してこれを読ませた。老師は琅琅ろうろうとして二、三頁を読み進んだ。東ガイはこれを見て、「寧馨児」ねいけいじ（素晴らしい子供だ）と賞賛した。それ以来、東ガイの命により、老師は毎日周儀の二礼らいを読み、同時に『莊子』と『徂徠集』にも読み及んだ。

老師は一日独語して言った、「莊子は孔子より偉大であり、徂徠は孔子より劣る」と。それからは徂徠を読まなくなったという。想うにこの頃の老師は孔子よりも莊子を重視していたのであろうが、後になると、『禅海一瀾』を見れば分かるように、聖人の中の聖人ともいうべき孔子の偉大さが心底理解出来る様になるのである。

藤澤東ガイの塾に在ること五年、その間、篠崎小竹、広瀬旭莊かんの門に往来して、宋学の体裁ていさいを聴いたが、どれも老師の意に適わなかったので、別に折衷せっちゅう学を唱えて、大坂の中之島に塾を開いたが、時に十九歳であった。塾生は諸侯藩邸の武士や医師、僧侶など常に三十人を下らなかったという。昼間は講義、夜は読書、孜孜ししとして研究することおよそ五年。或る日『孟子』を講じていて、有名な「浩然」こうぜんの章に至って、忽ち声を挙げて言うには、「孟子は浩然を説き、我は浩然を行なう」。門人はそれを聞いて皆驚嘆した。

このことがあって以来、老師は脱俗（出家）の志を抱くようになった。両親はこのことを憂えて、田中家から嫁を迎えて老師の妻とした。この時代は結婚に関しても、本人よりも親の意向が力を持っていたのである。しかし老師の決

意は堅固なものでいささかも動じなかった。頻りに名師を慕って鬱々<sup>うつうつ</sup>として日々を過ごしていた。

父は『禪門宝訓』を与えて老師に読ませた。この本は中国宋代の禅僧たちの言行録である。老師はこの中の達觀<sup>えい</sup>穎の語を見て益々発憤して、時の至るのを待つのみであった。この語と言うのは、結局は理窟では駄目で実体験がなければならぬと言う内容であった。

これより先、老師はにわかに頭痛を病んだ。ちょうど刀で胸を刺された様な痛みであった。日光をみる事が出来ずに、白昼でも戸を鎖して泣き伏すばかりで、数日間その症状が続いた。師は言った、「およそ大いに為す所の或る人は必ず換骨の病がある、これは吉兆だ」と。

尾州（名古屋）の出身者の宗斧<sup>そうふ</sup>上座という人が大坂にやって来て郷里の円通庵に投宿した。庵主は上座に洪川老師の出家の願いを語った。宗斧上座は言った、「近国に名僧を探すなら、八幡の円福寺に海山がいるし、京都の相国寺に大拙がいる。海山は高齢のために恐らくは壮年の者を鍛えることが困難であろう。大拙は嶮峻で鬼大拙と呼ばれている程だ」と。

老師の父がたまたま円通庵の庵主を訪れて、庵主から宗斧上座のこの言葉を聞いた。父は急いで家に戻って、このことを老師に伝えた。恐らくこの頃には父は老師の熱意に打たれて出家脱俗の願いを承認していたものと思われる。老師は言った、「不幸にして道の為に命を捨てることになった、師として鬼大拙の名を持つ老師のもとで厳しいご指導を受けたい」と。

早速、雲水の旅支度を整えて京都に赴こうとした。両親も老師の決意が尋常でないのを知ってこれを受け入れ、親類一同を集めてこれを告げたところ、衆議紛々として何人もの人がやって来て老師を押しとどめようとしたが、老師はいささかも動ぜず、遂に出家が決定したのである。時に天保十一年（一八四〇）九月八日で、二十五歳の折りで、翌日は重陽ちようようで権現の祭りの日であった。

老師は親類一同と門人達を招いて訣別の一席を設けることに、父母の同意を得た。老師は一人一人に愛用していた書籍や什器を贈って、次の漢詩を示した。

孔聖釈尊別人に非ず、彼は見性と謂い、此れは仁と謂う。

脱塵怪しむことを休やめよ吾が粗放、箇の浩然一片の真を行なわん。

人々は大いに心を動かされて皆厚く餞別を持って来たが、老師は固辞して受けず、かつ次のように述べた。「不幸大道の為に自分の命をなげうったので、どんな好物でも必要ではない。」人々はこれを聞いて老師の言うがままに従った。老師はまた妻に一枚の紙に次の一文を書いて渡した、「私とお前とは例えば糸をもって土人形をつないだようなものだ、今その糸は切れて私は寺に入る。穢土えどを厭離することはこの通りである。九華道人、お麻氏。」

こういう一文を手渡して妻と離縁するなどということは、現代の我々から見れば人権蹂躪じゅうりゃんも甚だしいものがあるが、ともかくも老師はこうして離縁して出家したのである。

その夜に宗斧上座に従って船に上った。別れに臨んで、父は白隠禅師の権現の名号一幅を与えて、更に誠めてこう言った、「お前はこれから権現を信奉して、専ら進道無魔を祈れ。お前がもし道眼明らかになっていないのに大寺に住職することになれば、私にも一生の恨みが残る。お前が道の為に一生懸命に勤めるならば、たとえ私を打ち殺しても、いささかの恨みもない」と。

九月十日、万年山相国寺に登り、大拙承演老師に相見しょうけんして師資の礼（師弟の契ちぎり）を結んだ。とはいえ「鬼大拙」とあだ名される悪あく辣らつの宗匠である。た易く洪川老師の出家得度を許可するはずはなかった。三ヶ月の間、その為の点検の期間を設けたのである。

大拙老師は若き洪川老師に参禅を許して「隻手音声せきしゅおんじょう」の公案を与えた。これは江戸時代中期の臨済宗の名僧である白隠慧鶴禅師（貞享二年―明和五年、一六八五―一七六八）が創始した公案で、『片手の音を聞いてみよ』というのである。両手をたたけば音が出るが、片手だけだと音の出ようがない。その音なき音を聞けというのだから、何とも取り付く島がない。

この公案のみならず、一般に禅の公案の狙いは、我々の通常の知解分別ちげふんべつを根こそぎにすることに在るので、どうしてもそういう知性を超えた矛盾的表现をとらざるを得ない。公案は頭で考えても分かる訳はない。その公案そのものに成り切って頭のでっぺんから足のつま先までその公案で充実してしまうことが、何よりも要求されるのである。

洪川老師は師匠の大拙老師から授けられた「隻手音声」の公案に満身成り切

るべく、孜々兀兀ししいついつとして脇目も振らずに真一文字に取り組み、あるいは七日間の断食摂心をしたり、あるいは北野天満宮に参詣して、拝殿や廊下や露地で徹夜の坐禅をしたりと、文字通り命懸けの猛修行に励んだ。

この様にして大拙老師のおそばに仕えながら修行すること三ヶ月に及んで、ようやく大拙老師は洪川老師を或る日呼んでこう告げた、「お前がこの道場にやってきて以来、その修行振りをじっと見ていたが、どうやら本当の願心を持っている様だ。剃髪して参堂するがよい」と。

「参堂」とは「新到参堂」といって、禅堂で坐禅する雲水の仲間入りすることであり、この場合、洪川老師は大拙老師を本師しゆし（授業の師）として出家することになったのである。ちなみに出家して或る道場で雲水修行するには、いずれかの寺の徒弟となり、本師を持つことが必要となるが、洪川老師の場合は、本師と参禅の師とが同じという特殊なケースであった。

その修行振りが真剣そのものであったのは、勿論その道心が深かった故ではあるが、儒学の塾頭を辞めて弟子達とも別れ、妻をも離縁し、嚴父からの励ましもあつたなど、まさに背水の陣で雲水生活に飛び込んだ結果でもあつたと思われる。

ともかくもこうして十二月二十三日、大拙老師を本師として洪川老師は剃髪授戒の得度式を受け、師の一字を頂いて守拙と安名あんみょうされた。こうして正式の禅僧となって、相国寺僧堂に掛搭し、禅堂の一員として日々怠慢することなく修行生活に邁進することになった。



洪川老師は朝晩二回参禅して、与えられた「隻手音声」の公案に対する見解<sup>けんげ</sup>を大拙老師に呈したが、そのたびに老師は、「言うことはなかなか言うが、徹底しとらんわい」とか、「よいことはよいが、体験がないわい」と言うのみで、この様にして瞬く間に三年の歳月が流れたが、一向に何らの指示もなかった。

この時、もし師家が変な老婆親切を起こして絵解きなどをすると、学人のせつかくの自発的かつ自然的な内面的純熟を阻害してしまうことになる。点滴も施さず無慈悲の慈悲を行ずることが最高の親切なのであるが、師家の方も少根劣機の者には決してこういう悪辣<sup>じんじん</sup>な手段を採ることはない。そういう者は師家の深々<sup>じんじん</sup>にして広大な慈悲心が分ならず、かえって自己の骨折り不足を棚に挙げ、師家を恨んだり、悪<sup>あ</sup>し様に非難<sup>びなん</sup>することをやりかねないからである。今、鬼大拙老師が洪川老師（守拙上座）に対して、この厳しいやり方で接せられたことは、この直弟子を上根（上々の根機）の者と見込まれたことであろう。

しかし、「片手の声を聞け」という、知解<sup>ちげふんべつ</sup>分別をもつてしては如何ともし難い公案に取り組んで、にっちもさっちも行かなくなってしまった洪川老師は、一時は初心の志も挫けんと絶望に陥ったが、これではいかんと氣を取り直して、自らを強く鞭策したという。

こうした折り、大拙老師は僧堂で仏光国師（無学祖元禪師）の行状を連日にわたり提唱された。国師は相国寺の勸請<sup>かんじょう</sup>開山である夢窓国師の法の上の祖父筋に当たる稀代の名僧であり、中国から日本に渡来され、後に鎌倉の大本山円覚寺の開山とされたお方である。

無字の公案を工夫すること実に六年、はからずも三昧境の極致に没入してわが身を忘じ、身と心とが完全に分かれて殆んど死人の状態になり、そこから大活現前して蘇生されたという逸話のある名僧で、古来数多くの優れた禅僧達に尊敬された方である。

この国師が十二歳の頃、父に連れられて山寺に遊び、僧の「竹影階を掃うて塵動ぜず、月潭底を穿つて水に痕なし」(自己を忘じた者の無心無作の妙用)という一句を吟ずるのを聞いて省有りという一段に至り、この提唱を聞いていた洪川老師も忽ちその真意を徹見して、丸で心中のわだかまりが一举に消え失せたようであつた。

勢い込んだ洪川老師は、講座の終わるのを待ちかねて大拙老師の室内に入つて体得した所解を呈しようとした。然るに「鬼大拙」とあだ名される悪辣の老師は、有無を言わず怒り罵つて打つのみであつた。参禅するたびにこのような状態が続いたということであるが、これは果たしてどういうことか。

洪川老師が仏光国師の逸話に関する提唱を聞いて思いがけなく心境が開けたことは確かである。しかしそれは、師家である大拙老師から見れば、まだまだ不充分で更に向上を要する境涯であつた。「我会せり(悟った)」と早合点し勢い込んで飛び込んで参禅に來た洪川老師に対して、「よくやった」などという甘い言葉を一寸でもかければ、小を得て足れりとして自惚れてしまい、大器を成ずることなく終わらせてしまうことになる。白隠和尚も良哉上座りようさいに関してこういう至らぬ指導をしてしまったことを、後に大いに悔くいておられる。徹困

親切な師家はこういう場面に遭遇すれば、それまでも増して厳しい鉗鎚けんついを下すのである。

果たして、大拙老師の冷酷無比な接得振りによって、洪川老師は益々抜き差しならぬ袋小路に入ってしまった。参禅が終われば常に涙を浮かべて退き、路地の人の居ない所で涙をポロポロと流した。あるいは、涙でぬれていた眼を、今はもう枯れてしまった龍淵水の流れで洗って禅堂にまた戻り、あるいは、禅堂の背後にある照堂（開山堂）の常夜燈のもとで、涙を吞んで宿世の罪業深重なるが為になかなか本志を遂げられないことを懺悔した。

この時の洪川老師の心中たるや、誠に暗澹たるものであったことは想像に難くない。とはいえ、これは全身全霊を賭としての真剣な骨折りの挙句の果ての純熟であり、修行の上からは好時節といつてよい。

安居あんじの終わり頃の制末に至って、大拙老師は病の為に夜参を許されなくなり、洪川老師は病床のお世話をした。翌年名古屋の総見寺で卓洲和尚の齋会があり、相国寺僧堂の雲衲衆うんのうもこれに赴いて一夏げ（半年）を過ごしたが、独り洪川老師のみ師のそばを離れなかった。この夏、大拙老師は大智院の侍真寮に閑居して療養に専念したが、洪川老師の入室参禅だけは許可された。洪川老師もまた意気を感じて、看病の寸暇を惜しんで意を決して工夫参究したのである。

この時、元規上座が知客寮しかとして洪川老師とともに僧堂りゅうどうに留護りゅうごしていたが、その刻苦さまの様を見て、時々慰問し、古人の刻苦べんれい鞭あんり励あんりの行履を語って激励した。この元規上座こそは、後の名僧独園老師どくおん（文政二年―明治二十八年、一八一九

―一八九五―であるが、僧堂の垣のいばらを集めてその上で坐り抜くような刻苦の果てに、鬼大拙老師の惡辣極まる鉗鎚下で既に見性大悟していたのである。こうして先輩雲水の温情溢れる励ましを受けて、洪川老師自身も益々全精魂を傾けて工夫三昧に骨折った。

年譜ではこの所を、「師亦自ら鞭逼べんひつ精励、刻苦一日一日よりも甚だし。晨参暮叩、頭燃しんさんぼこう ずねん はらを救うが如し」と形容している。「刻苦一日一日よりも甚だし」とは、前日よりも今日、今日よりも明日と、益々刻苦の度合いが雪達磨式に昇じて行く有様であり、「晨参暮叩、頭燃を救うが如し」とは、朝晩二回の入室参禅に向けて、あたかも頭についた火を必死に消そうとする人の様に、脇目も振らずに急切に公案を工夫したというのである。

公案禅においては、ともすれば古人ゆかりの機縁である公案は、自己の切実な問題とは成りにくいので、頭でさばいて事足れりとする傾向がないとはいえない。しかしそれでは本来の目標である生死解脱など思いもよらず、かえって公案を透過したということで、我見我慢を増長させることになる。

それをそうせずに、真に学人自身の全存在を賭した大問題たらしめるのが、師家の力量であり学人の菩提心である。今、洪川老師の場合は、自己の燃えるような願心に加うるに、「鬼大拙」という恰好の嚴師を得たのである。

果たして大拙老師は、洪川老師の苦悶や刻苦の様を見ても依然として棒喝を行ずることをやめず、顔を見ただけでまるで敵かたきのように怒って叱り飛ばすばかりであった。これは、大拙老師ご自身が名僧太元孜たいげんしげん元老師の会下えかにあつて刻

苦された経験から、この八方ふさがりの黒漫々地の場を打破するには、それこそ一層の精進を必要とすることを良く知っていたからである。

この時もし師家が手加減したり温情に流されたりすれば、学人はなかなか転迷開悟の機会を得ることが出来ないであろう。こういう時節は、よほど因縁が熟さなければ到来しないからである。そこで禅門では、この師家の徹困の親切とも言える悪辣な手段を、「耕夫の牛を駆り、飢人の食を奪う」と言つて貴んでいるのである。

洪川老師はこの無慈悲の慈悲を行ずる大拙老師に対していささかの疑いも持たず、益々謙虚になつて誠心誠意の限りを尽くした。僧堂の日常の作務万般に労を忘れて全身全霊を投入する日々が続いた。この時に当たつて洪川老師は、最早言わんと欲しても言うべきことも無く、呈しようと思つても呈すべきものも無くなり、いよいよ伎倆ぎりょう既に尽き進退これ極まった。心に何の楽しみも無くなり、飲食味無しおんじきという状態に陥り、姿かたちも憔悴し切つて顔色も土の如くになつて来た。人は皆、「守拙上座は禅病にかかった。近いうちに必ず死んでしまふぞ」と噂した。

こうしたある夕方のこと、相国寺僧堂で誠拙しゅうちよ周樗老師の毎月忌に際して、大拙老師は院に歸つて就寝された。

洪川老師は、心ひそかに「わが工夫はまさに純熟し、大悟の時が至った」と思った。深夜独り禅堂に入つて、精神を奮い立たせて、確しかと坐禅摂心して、まぶたを合わせること無く工夫し抜いた。深く公案三昧に入つて、夜が明けて窓

が白けて来るのも分からないほどで、ただ恍惚として暁の開版が時を知らせる  
音声<sup>ていせい</sup>が、わずかに耳に入ってくるのを覚えるだけであつた。悦びに堪えず、い  
よいよ益々公案を提撕<sup>ていせい</sup>して終日禪堂から出ずに坐りに坐り抜き、工夫に工夫  
をついで少しの間断も無く、寢食も忘じ果ててしまった。

こうしてえも言えぬ三昧境に入ってしまったかも知れすら忘ずるほど工夫に没頭し、  
夕方<sup>たそがれ</sup>のたそがれ時になった頃、忽然として前後際断して実相が現前し、絶妙の  
佳境に入った。眼や耳も皆無くなり、見聞きする自己も空じ尽くしたのである。  
程なくして胸のうちに豁然<sup>かつねん</sup>として、真眼が開けた。大好事が見え、大好声が聞  
こえた。これまでの疑团が一遍に氷消した。

黙していることが出来ず、思わず口をついて連呼した、「われ神悟せり、わ  
れ神悟せり。百万の經典も真昼の燈の様に無用となつてしまった。不思議だ、  
不思議だ」と。そして投機の偈を作つて曰く、「疎濶なり孔夫子、相逢う阿堵<sup>あど</sup>  
の中。誰によりて多謝し去らん、好媒主人公」(ご無沙汰しました孔子様、今  
この瞬間にはつきりとお目にかかりました。もう人様に仲介して頂く必要は無  
くなりました。こうしてじかにお目にかかっているのですから)(盛永宗興訳)  
と。

早速走つて大拙老師のおられる院に行き、見解を呈すると、老師は初めてに  
つこりと微笑まれた。洪川老師は申し上げた、「かつて禪に妙悟があると聞い  
ておりましたが、今日初めて古人のその言葉が偽りでない事を知りました」と。  
大拙老師が言われるには、「貴公は一旦の慶快をもつて足れりとしてはならぬ。  
これ以後は四弘の誓願に鞭打つて、無量の妙慧を煥発し、無数の因縁を透過し

て、末後別に生涯が有ることを識得せねばならぬ。般若の智慧を欠いた定は邪定である。慎んで無念無心に尻を据えてはならぬ」と。その他懇々として涙を浮かべながら大拙老師はご垂誡されて、夕方より午後八時に及んだ。洪川老師は感涙に咽んで退出したという。時に天保十三年（一八四二）四月二十七日のことで、洪川老師二十七歳のことであった。

それ以来、入室参禅するたびに、大拙老師は数段の古人の因縁（公案）を浴びせ掛けられたが、洪川老師は、或いは直下<sup>じきげ</sup>に看破し、或いは一兩日で透過し、一向に行き詰まることはなかった。日常の一挙一動も快活そのもので、自然に口から妙言を吐き、機<sup>はたらき</sup>は妙用を示した。

或る夜、大拙老師が師に対して言われるには、「仏法の一大事（箇の事）は譬<sup>たと</sup>えば珠を剥琢<sup>はくたく</sup>するようなものである。剥<sup>けず</sup>れば剥るほど益々光り、琢<sup>みが</sup>けば琢くほど益々明らかとなる。衲<sup>わし</sup>はすでに貴公を一度剥り琢いた。貴公自身でする幾生涯の工夫にも勝るものだ。このことを思わねばならぬ」と。こう言って大拙老師は「臨危不変、真大丈夫（危うきに臨んで変ぜざるは、真の大丈夫）」という一句を書いて渡された。洪川老師は歓喜に堪えず、日を追って心境外見ともに精彩を加えて、禅病といわれた症状もいつの間にか自然に快癒<sup>かいゆ</sup>して、外見ももと通りになり、顔色も潤いを増した。人々は皆大いに不思議がったという。しかし、洪川老師は身を慎んで歓喜を秘して漏らさず、密々に参究して怠ることがなかった。

弘化四年（一八四七）の夏、備前岡山にある曹源寺の儀山善来老師が、初めて専門道場を開いて結制を設けられたので、洪川老師は大拙老師の命により、

曹源寺へ転錫して修行することとなった。儀山老師は、大拙老師と同じく、曹源寺の太元孜たいげんしげん元老師の会下えかで修行した孤危嶮峻な名僧である。

大拙老師が洪川老師を自分の手元に置いたままにせずに、道友の儀山禪師に託されたのは、愛弟子の大成を心から願う本師大拙老師の大悲心である。洪川老師もよくその期待に応え、更に儀山老師のもとで刻苦し、遂に儀山老師の法を嗣ぐことになるのである。

これまで述べたところから、禪の真実の修行の何たるかが分かるであろう。願わくは一箇半箇でもこうした本当の修行をする有為の人物が出てきて、天下の蔭涼樹（その蔭で大勢の人が憩えるような法の大樹）になって頂きたいものである。

参考文献 今北洪川『禅海一瀾』（盛永宗興訳・柏樹社刊）

この文章の無断複製・転載を禁じます

著者 田中寛洲